

# ゲーテの『ウェルテル』と門

北 原 博

大阪市立大学大学院文学研究科 COE 研究員

## はじめに

ゲーテ(Johann Wolfgang Goethe, 1749-1832)の『若きウェルテルの悩み』*Die Leiden des jungen Werther*<sup>1</sup>(1774年)は、司法修習のために滞在したヴェツラルでのゲーテ自身の体験と、ゲーテがこの都市を去った後に起こった公使館書記イエルーザレム(Carl Wilhelm Jerusalem, 1747-1772)の自殺事件を基に書かれた書簡体小説である。作品中に登場するいくつかの場所は、ヴェツラルおよびその近郊にそのモデルを認めることが出来るが、仮に名付けられたヴァールハイム(Wahlheim)くらいしか地名が登場しないので、地名が具体的な都市の街区の表象を喚起することはなく、実在の都市の区域が不可分な要素として作品と結びついているわけではない。つまり、作品世界として特定の都市ヴェツラルをイメージすることを読者は要求されていないのである。それどころか、主人公ウェルテルが滞在している都市については、具体的な記述は全く見当たらない。

作品中で特定されているのは空間ではなくむしろ時間である。書簡体とい

---

<sup>1</sup> 作品名にも含まれている主人公の名前の Werther であるが、本報告の場が学際的なシンポジウムという性格も考慮し、独文学関係者以外にも広く馴染まれている「ウェルテル」を敢えて採用した。

う小説形式は必ずしも具体的な日付を要求しているわけではないのにも拘らず、<sup>2</sup> ゲーテは「1771年5月4日」という正確な日付からウェルテルの書簡を始め、ウェルテルの自殺を翌年の12月23日に日付が変わった直後に設定している。ゲーテ自身のヴェツラル滞在は1772年5月末から同年9月11日までのことであるし、作品執筆の契機となったイェルーザレムの自殺は同年10月末であるので、作品世界の時間は作者によって意図的にずらされている。時間が明示されているために、作品の構造と時間の流れとの関連がこれまでの研究では度々分析されており、作品の第1部と第2部での季節への重点の変化が指摘されたり、<sup>3</sup> 主人公の自殺をクリスマスではなく日照時間がもっとも短くなる冬至と捉えることで、闇と光という2元の交替という新プラトン主義的な解釈がされたりしてきた。<sup>4</sup> こうした時間に着目する作品解釈の多様さに比べて、作品空間については郊外への言及に限られ、都市の構造が作品にとって持つ意味については注目されてこなかった。

季節の移り変わりという時間から見た作品の構造が『ウェルテル』を理解する上で極めて重要であることはこれまでの研究からも明白であるが、本稿で示すように、作品世界の持つ空間的な構造もまた作品の本質と結びついている。その空間構造とは、都市の持つ境界によって作品世界が都市の内部と外部とに分けられているということである。そして、この構造はまた主人公

---

<sup>2</sup> 書簡体小説が正確な日付をもつことには先例があるが、決してこの形式の小説が要求する規則ではない。Vgl. Klaus Müller-Salget: *Zur Struktur von Goethes »Werther«*. In: Hans Peter Herrmann (Hrsg.): *Goethes »Werther«. Kritik und Forschung*. Darmstadt 1994, S.325.

<sup>3</sup> 第1部では5月から8月に、第2部では10月から12月に書簡が集中しており、季節へのアクセントに変化が認められる。Vgl. Müller-Salget: a.a.O., S.326. なお、季節と主人公の置かれている精神状態との関連については、シンポジウムの場でハンブルク大学ユーディット・アロカイ先生からもご指摘いただいた。

<sup>4</sup> Vgl. Rolf Christian Zimmermann: *Das Weltbild des jungen Goethe. Studien zur hermetischen Tradition des deutschen 18. Jahrhunderts*. Zweiter Band: Interpretation und Dokumentation. München 1979, S.208-210.

の内面と結びついており、以下ではこの結びつきを明らかにしていくことにする。

## 『ウェルテル』の都市

まずは『ウェルテル』の時代の都市構造を確認しておきたい。時間のみならず空間的にも作品の世界から隔たっている我々が、『ウェルテル』の都市を我々が抱いているイメージで単純に捉えるわけにはいかないからである。特定の都市に存在する各地区の持つコードについては作品でも全く触れられていないので無視しても構わないが、少なくとも当時のドイツの都市構造についての一般的な理解は必要である。本稿末尾に添付した地図(図1)は1806年のものだが、この『ウェルテル』発表から30年以上後の地図からも分かるように、ゲーテが滞在した当時、ヴェツラルは13世紀に作られた市壁(Stadtmauer)で囲まれていた。小邦に分立していたために、他のヨーロッパの都市に比べて都市が大規模化しにくかったとはいえ、ドイツ語圏でも18世紀末までには都市の拡大のために市壁を崩して緑地公園に変えていく都市が出てきた。<sup>5</sup> しかし、ヴェツラルは鉄鋼、毛織物産業が中世末期に衰退した後、17世紀末に帝国最高法院の移転で都市の性格を新たにするこ  
とで人口の増加が認められるとはいっても、1805年の人口がせいぜい5068人の小都市に過ぎない。<sup>6</sup> この都市が市壁を本格的に撤去するのは19世紀半ばのことで、『ウェルテル』の時代には未だ中世的な相貌を持った都市だったのである。現代都市からの類推では、当時の都市が持っていた物理的な

---

<sup>5</sup> エンゲルハルト・ヴァイグル『啓蒙の都市周遊』三島憲一、宮田敦子訳 岩波書店 1997年、27頁参照。

<sup>6</sup> Vgl. Heinz Schilling: *Die Stadt in der frühen Neuzeit*. München 1993, S.21.

境界をイメージできないので、我々は時間的・物理的隔たりがもたらす都市イメージの差異に注意しなくてはならない。

ウェルテルが滞在する都市もまたヴェツラル同様の都市と設定されているのだろうか。まずこのことについて、作品に基づいて確認しておきたい。実は『ウェルテル』では、作品の中で市壁が描写されてはいない。すでに述べたように、そもそもウェルテルが滞在する都市の内部については、その郊外とは対照的に、ほとんど作品では描かれることがない。唯一の例外は都市の境界に位置する市門(Stadtmauer)で、ウェルテルの郊外への移動の際に何度か言及されている。

彼は市門にやって来た。番人たちは、彼には慣れっこだったので、黙って外に出してあげた。雨とも雪ともつかぬ霧雨が降っていた。11時ごろになってやっと彼は再び[門を]たたいた。[…](HA VI 115)

ここからは、ウェルテルが都市を抜け出す際に市門を通り抜けているということ、そして再び街中に戻ってくる際にも門を通らなければならなかったことが読み取れる。作品では都市を囲む市壁への言及はないとはいえ、市門の存在によって都市には外との境界があることが分かる。『ウェルテル』の都市は、郊外にすぐ田園風景が広がる単なる田舎町であるというばかりではなく、当時のヴェツラル同様に、都市の内側と外側とに市壁という明確な境界を持った中世的な都市をイメージする必要があるのだ。

### 肯定的に描かれる郊外

ウェルテルが作品冒頭付近で、「都市自体は不快だけど、その代わり周り

には名状しがたい自然の美しさが拡がっている」(HA VI 8)と書き記しているように、この書簡体小説の前半には、「都市対田園」の構図が読み取れ、都市は否定的なものと捉えられている。しかし、都市自体については「不快」の一言で片付けられてしまい、都市のどのような点が否定的なのかについては、具体的に言及されることはない。ウェルテルにとって都市は、彼自身が営む日常生活の場であり意識化されることはないので、彼はわざわざ友人宛ての書簡で都市生活について触れることはない。都市がその姿を現すのは、ウェルテルの郊外での体験に都市住民の思考が抵触する場合に限られる。ウェルテルの都市住民間については後述することにして、ここではまず彼の享受する郊外について検討してみることにしよう。

ウェルテルは自分の滞在する都市には馴染めなくても、市門を出さえすればすぐに素晴らしい情景に身を委ねることが出来る。

5月12日

この辺りには人を欺く精霊が漂っているのか、それとも、辺りのものの全てを楽園のようにしてしまう、温かい、天上のような想像力が僕の心に宿っているのか、僕には分からない。町を出てすぐのところに泉がある。メルジーンとその姉妹たちのように、僕が惹きつけられている泉だ。小さな丘を下るとアーチがあり、そこを20段ほど降りていくと、大理石から澄んだ水が湧き出している。小さな壁が上方の周りを囲み、高い木々がこの場所の周りを覆う、この場所の涼しさ。こうしたものには皆、何かひきつけるものがあり、何かぞくぞくとさせるものがある。僕が1時間もここに座っていないような日はない。するとそこに町から女中がやって来て、水を汲むのだ。とても無邪気な仕

事だし、必要な仕事だ。かつては王様の娘たちだって自分でやっていたのだ。そこに座っていると、族長時代のイメージが生き生きと僕の周りに息づいてくる。族長たちはみな泉で知り合い結婚するとか、泉の周りには慈悲深い精霊が漂っているといったようなイメージがね。こうしたことに共感できない人は、夏の日に苦しい徒歩旅行をした後、泉で涼をとって元気を回復したことがないに違いない。(HA VI 9f.)

ウェルテルが好んで憩っている泉は町の外にある。この泉のモデルは現在もヴェツラルに残されていて、ヴェルバッハ門(Wölbacher Tor)を出てすぐの位置にある。もちろん水は生活上必要不可欠なものだから、都市住民にとって水を確保することは至上命題である。この都市は、城壁の内側に 1341 年以来水道を外から引き、コルンマルクトなど 4 箇所に公共の泉を持っていた。<sup>7</sup> ヴェツラル市民にとって、当時ヴェルバッハ門近くの泉が唯一の泉だったわけではなく、ゲートが下宿していたコルンマルクト(Kornmarkt)にも泉はあったのだ。ゲートは下宿の目の前にある泉ではなく、市門の外側にある泉の印象を作品に取り入れたのだった。もし泉にのみ意味があるのならば、市門の外の泉である必然性はない。ウェルテルは「この場所の涼しさ」とか「泉で涼を取って元気を回復」と書き記すことで、泉の周りに漂う涼気に惹きつけられたことを述べている。人工的に形成された都市の中の広場には、辺り一帯に影を落としてくれる高い木々はない。水がほとぼしり喉を潤すことが出来るとはいえ、憩いの場としては不十分なのだ。

---

<sup>7</sup> Vgl. Irene Jung: *Zeitreise durch Wetzlar. Ausflüge in die Vergangenheit*. Gudensberg Gleichen 1995, S. 20. また、ファールブッシュが再構成したヴェツラルの市域拡大を示す地図からも、この都市の水道の状況が読み取れる。Vgl. Friedrich Bernward Fahlbusch: *Deutscher Städteatlas Lieferung III Nr. 10. Wetzlar*. Altenbeken 1984.

もっとも、ウェルテルがこの泉の心地よさにのみ惹きつけられているわけではないことに注意が必要である。ウェルテルが「族長たちはみな泉で知り合い結婚する」と書き記すように、旧約聖書の世界では泉はしばしば神の助けで結婚相手を見つける場となっており、<sup>8</sup> 泉は超越的な力が介在してくる場でもある。だからこそ、彼はここに何かぞくぞくとするものすらも感じ、この泉の辺りに精霊を感じているのだ。それに対して都市の内部には精霊が息づく余地はない。

第 1 部 7 月 6 日付の書簡でウェルテルが語るエピソードから、さらに泉に込められた意味を検討してみよう。散歩に出たロッテとその妹たち、ウェルテルは、泉に立ち寄る。その際、ロッテの妹マールヒェンが水を汲みロッテに飲ませようとする、もう 1 人の妹であるマリアーネが横取りしようとしたためマールヒェンは拒絶する。その拒絶の叫びの素直さに感激したウェルテルは、思わずマールヒェンを抱きしめてキスをしてしまう。マールヒェンは、若い男にキスをされるとひげが生えるという迷信を信じていたために、大声で泣き出してしまおうのだが、ロッテは泉の水ですぐに洗えば大丈夫であると慰め、マールヒェンからひげが生える恐怖を取り除いてあげる。ここにウェルテルは浄化作用を持つ水の力を認め、敬虔な気分で洗礼の奇跡に思いを致す。

ところが、この話を 1 週間前に洗礼を受けたばかりの都市住民にすると、ロッテが迷信を正さなかったことを批判されてしまう。ウェルテルはこの人

---

<sup>8</sup> アブラハムの息子イサクの妻リベカは、アブラハムの老僕が泉で神に願いをかけた結果連れてこられることになるし（創世記 24 章）、イサクの息子ヤコブと妻ラケルとの出会いの場も泉である（創世記 29 章）。なお、泉での出会いというモチーフは、ウェルテルのロッテとの出会いを先取りするものとされる。Vgl. Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. I. Abteilung: Sämtliche Werke Band 8. In Zusammenarbeit mit Christoph Brecht herausgegeben von Waltraud Wiethölter. Frankfurt am Main 1994, S. 962.*

物には「分別(Verstand)があるので、人間らしい感性(Menschensinn)を持ち合わせていると信じていた」(HA VI 36)のために、共感を得ようとこの人物に泉でのエピソードを話したのだった。しかし、市壁の内側に属するこの人物には、洗礼を受けたばかりだとはいえ、奇跡や精霊の息づきを感じ取る感性が欠落している。彼にとっては、洗礼はもはや水の持つ浄化の力で原罪を洗い清める奇跡などではなく、形骸化してしまっているのだ。

都市の住民には分別はあっても感性に欠ける、こうしたウエルテルの都市住民観は作品の他の箇所にも認められる。大学を出たての V という若者は著名な学者の名を並べ立てるばかりで、ウエルテルが「いいようにさせておいた」(HA VI 12)と述べているように、彼には辟易としている様子が伝わってくる。また、都市から来た医者「教条的な操り人形」(HA VI 30)と見なされ、自分自身の考えで判断するのではなく、形式的に物事を切り分けていく態度にウエルテルは反発している。さらに、7月11日付の書簡で紹介されている、死の床にある M 夫人のエピソードでは、商人である夫の分別がいかに欺かれていたのかが明らかにされている。このように、都市に属する人々は分別のみに偏った、バランスを欠く人物として描かれ、ネガティブなものとして捉えられている。

他方、市門の外側に属するものに対して、ウエルテルはことごとく共感を寄せている。作品の中でウエルテルを感激させるのは、市門の外の泉ばかりではない。作品中でヴァールハイムと呼ばれる、町から1時間ほど離れた集落もまたウエルテルのお気に入りの場所となる。ここにもモデルがあり、ガルベンハイム(Garbenheim)という集落がそれとされている。ヴァールハイムでもまた、ウエルテルが腰を落ち着けて眺めたり声をかけたりするのは、泉の場合と同様、農家の使用人など自分よりも身分が低い人々である。それに子供たちもウエルテルが好んで眺める対象で、彼らとはすぐ仲良くなって



しまう。子供は大人と違って自分の欲望に素直である。理性によって秩序づけられたものではなく、感情の赴くままに振舞うことが出来る、そうした姿にウェルテルは幸福な存在を認めている。<sup>9</sup> こうした子供の特質には、ウェルテルの生きるシュトゥルム・ウント・ドラングの時代が求めた、総体としての人間像<sup>10</sup>に通じるものがあるのだ。

作品では、ヴァールハイムからさらに 30 分ほど行くと、ウェルテルの恋人ロッテが家族と共に住んでいる館がある。ロッテの父親は侯爵領の地方官で、妻の死後街中での生活が耐えられなくなって、許可を得て狩猟用の館に住んでいるとされている。この館は、ヴェツラルの南東部シュトッペル山 (Stoppelberg) のふもとにあったナッサウ侯の館とされているが、ロッテの家族のモデルとなったブッフ家はここに住んでいたわけではない。実際にはブッフ家は、今日ロッテハウスとして公開されているドイツ騎士団 (Der Deutsche Orden) の館に居を構えており、市壁の中に住んでいた。

地方官一家の住む狩猟用の館でのウェルテルとロッテの出会いの場面、つまり舞踏会に参加するためのドレスを着たロッテが、弟妹たちに黒パンを切り与えている場面は、ウェルテルの抱くロッテ像を端的に示している大事な場面である。パンを切り与えていることが示すように、ロッテは弟妹たちにとっては母親の役目を果たしているが、同時に舞踏会を楽しみにしている感傷世代の娘でもある。ウェルテルはこの場面に、母親の役目を果たすことで現実感覚を備えつつ、そうかといって分別のみで共感に欠けた人物ではなく、自分と感情を共有することの出来る調和的な存在を認めているのである。<sup>11</sup>

---

<sup>9</sup> Vgl. HA VI 13f.

<sup>10</sup> Vgl. Gerhard Kaiser: *Aufklärung, Empfindsamkeit, Sturm und Drang*. München <sup>3</sup>1979, S. 184.

<sup>11</sup> 柴田翔『内面世界に移る歴史・ゲーテ時代ドイツ文学史論』 筑摩書房 昭和 61 年、135 140 頁参照。

ウェルテルが「この上なく素晴らしい光景」(das reizendste Schauspiel, HA VI 21)と呼んでいる出会いの場面を、市壁の中の館ではなくて市壁の外側での出来事としたことには大きな意味がある。もちろん、ヴァールハイムをロッセの住まいへの中間点に位置付けることで、ヴァールハイムでのウェルテルの好印象をロッセとの出会いの伏線にしようとしていると言えよう。しかしそれだけではない。都市はウェルテルにとって不快なもの、ネガティブなものとして捉えられているので、この調和のとれたロッセ像は市壁の外側の領域に属すべきものであり、市壁の中から救い出されなければならないのだ。

### 現実空間としての都市

これまで検討してきたように、ウェルテルにとって都市はネガティブなものであり、肯定的に捉えられているのは都市の外側なのだが、ウェルテル自身は都市を捨てようとはしない。彼は市壁の内側に住みながら、幸福な感情を求めて市門の外に出て行き、そして再び戻ってくるという往復運動を続ける。ウェルテルはなぜ都市に留まり続けるのだろうか。ここでは、まずウェルテルと共に都市を嫌悪しているフォン・B嬢について、ウェルテルが語っている手紙を手掛かりに考察してみたい。

作品の第2部は、ロッセの許を離れてウェルテルが公使館の役人として赴任したDという都市からの手紙で始まっている。この地でウェルテルが知り合ったのが貴族のフォン・B嬢である。彼女について語るウェルテルの手紙を見てみよう。

[...]僕はB嬢についてお話したかったのです。豊かな心の持ち主であることは、その青い瞳に十分に現れています。彼女には身分が重荷

になっているのです。身分は心の望むところをひとつも満足させてくれないのです。彼女は雑踏を抜け出したいくてたまらず、僕たちは田舎の風景の中で何時間も純粋な幸福を空想するのです。ああ、そしてあなたのこともです。どれだけ彼女はあなたに敬意を表さなければならぬでしょう。しなければならぬ、じゃないですね。自発的にそうするのは、彼女は、あなたのことを聞くのが本当に好きで、あなたのことが大好きなのです。(HA VI 65)

ここにも肯定的なものと捉えられた田舎が登場する。フォン・B嬢が抜け出したい都市の雑踏は、同時に彼女の身分でもある。貴族という身分は、ウェルテルの手紙によれば、「心の望むところをひとつも満足させてくれない」のだが、それは身分という社会的関係が制限となってしまうからである。ウェルテルもまたB嬢同様心を制限されることを望まない。後述するように、ロッテに心を閉ざされることは、ウェルテルにとっては自殺を決断する契機になっているし、自分を評価してくれる侯爵についても、「分別の人」(HA VI 74)である侯爵が「この心より、僕の分別や才能を評価している」(HA VI 74)ことに不満を感じていることから、ウェルテルにとってもっとも大切なものが心情であることが分かる。「ロッテの代わり」<sup>12</sup>であるB嬢と共に、ウェルテルは都市の雑踏に心を制限する社会的諸関係や分別を認めるのである。

ウェルテルはこの手紙の直後、伯爵の館で開かれた貴族の夜会から追い出されてしまう。フォン・B嬢もこの場面に居合わせるのだが、貴族の令嬢として参加している夜会では、普段のようにウェルテルと言葉を交わすことも

---

<sup>12</sup> Thomas Kahlcke: *Lebensgeschichte als Körpergeschichte. Studien zum Bildungsroman im 18. Jahrhundert.* Würzburg 1997, S. 213.

ままならない。<sup>13</sup> ウェルテルと共に都市の雑踏を離れて「純粋な幸福」に思いをめぐらすのは、空想の時間であり、彼女にとっての現実ではない。彼女の現実はいくまでも都市の内部にあるのだ。そしてその現実が、自分の内に宿る可能性を抑圧しているように、現実の境界である市壁は、現実から広がり出ようとする個の発現を阻止するものの象徴でもある。だからこそ、ウェルテルは、フォン・B嬢と共に市門を通過して都市から抜け出すことで、現実からも抜け出そうとするのである。

都市が現実の舞台であるとするならば、市壁の外側は一体何なのだろうか。ウェルテルは B嬢と共に郊外で空想にふけていたのだから、郊外とは彼らの願望を映し出す虚構の世界であると言えよう。壁の外側には、市壁の内側に比べれば、はるかに制限のない空間が広がっている。そこでは個を全面的に実現することが出来るように思われる。そうした願望が郊外には込められているのだ。しかし、郊外の現れ方が、主人公の願望という主観に依存するのならば、主人公が幸福な願望を抱くことが出来なくなったとき、郊外もまた変化せざるを得ない。作品で郊外、あるいは郊外に広がる自然は、一貫して幸福を表すものであるというわけではないのだ。ロッテの許婚アルベルトの到着を報告する手紙（7月30日付）から3週間も経たない8月18日付の手紙では、「一体、人間の至福を産み出すものが、不幸の源泉とならなければならないのだろうか」（HA VI 51）と嘆き、自然の破壊的な側面におのいている。

僕の魂の前で幕が開けられたかのようだ。無限の生の舞台は僕の前で

---

<sup>13</sup> フォン・B嬢は、ウェルテルにとって「よき父」であるはずの伯爵同様にあくまでも既成の秩序に従属しており、存在と仮象、心情と振る舞いとの不一致をさらけ出すことになる。Vgl. Kahlcke: a.a.O., S. 213f.

永遠に開く墓穴の奈落へと化した。君はこう言い得るだろうか？それは在る！と。だって、全ては過ぎ去るじゃないか。[...]自然の一切の内に潜む食らい尽くす力が僕の心を蝕む。この力は隣人を、そして自己をも破壊しないようなもの他には何も形成しなかった。こうして僕は不安によろめく。僕を取り巻く天と地とその織り成す諸力。僕には永遠にむさぼり食い、永遠に反芻する怪物の他には何も見えないのだ。

(HA VI 52f.)

自然は創造と破壊とが織り成すものである。憂鬱質のウェルテルは、はじめ自然の創造的な面のみに目を向けていたのだが、アルベルトの到着によって、現実の中でロッセとの結びつきが不可能に思われると、今度は破壊的な側面しか見えなくなってしまう。ウェルテルの心情は両極端に揺れる。変化するのは自然ばかりではない。

市門を出て、ロッセを舞踏会に連れて行くために初めて通った道を行くと、何と変わってしまったことか。全ては、全ては過ぎ去ってしまった。かつての世界の片鱗すらない。あの時の感情の高鳴りもない。

[...](HA VI 76)

市壁の外側は全て一変してしまう。彼は、郊外の事物を見て自分の心情と重ね合わせてきたので、彼の心情の歪みは郊外の姿を歪ませ、次々に不幸な事件を発見していくことになる。<sup>14</sup> ヴァールハイムでウェルテルが知り合っ

---

<sup>14</sup> 『ウェルテル』は第1部と第2部とでパラレル構造になっており、第1部で理想と見なされていた郊外の事物が、第2部ではウェルテルの精神状態を反映して暗転している。Vgl. Horst Flaschka: *Goethes »Werther«*. *Werkkontextuelle Beschreibung und Analyse*. München 1987, S.196ff.

た教師の娘の子供たちは、彼の仲良しとなってしばしば小遣いを貰ったりしていたのだが、作品第 2 部で戻ってきたときにウェルテルが耳にしたのは、一番下の子供が亡くなったという知らせだったし、女主人への思慕が彼を感激させた農夫は解雇され、後に恋敵を殺してしまう。<sup>15</sup> さらに牧師館の立派な胡桃の木は、聖書研究に熱中する新しい牧師の夫人によって切り倒される。これら全てを、理想的な空間だったはずの郊外でウェルテルは目にすることになる。

これまで、市壁の中は現実空間であり、郊外はウェルテルの心情を映し出す鏡であるということを確認してきたが、この都市と郊外の捉え方は、ロッテ像の変化にも対応している。

フォン・B 嬢の許を離れて、ウェルテルは再びロッテの許に戻ってくる。しかし、ロッテはすでにアルベルトと結婚しており、それに伴い父や弟妹と住んでいた郊外の狩猟用の館から、市壁の中に移ってきている。作品中ではアルベルト夫妻の住居については明確に述べられていないが、ロッテの家を出たウェルテルが市門まで来て外へ出て行くという記述から、<sup>16</sup> ロッテもまたウェルテル同様市壁の内側に住んでいることが分かる。

すでに述べたように、ロッテがウェルテルと出会った当初市壁の外に住んでいるという設定には、調和的存在としてのロッテをネガティブな現実空間である都市から救い出す意味合いもあった。彼女の住まいが市壁の中に変わったということは、彼女が理想的な調和を保っていた存在から現実へと足を踏み入れなくてはならないということの意味しているのだ。しかもこのロッ

---

<sup>15</sup> 恋敵を殺害するこのエピソードは、ウェルテル自身の苦悩を映し出している 3 つのエピソードのひとつで、第 2 版に書き加えられたものである。Vgl. Gert Mattenklott: *Die Leiden des jungen Werthers*. In: Bernd Witte, Peter Schmidt, Gernot Böhme (Hgg.): *Goethe- Handbuch. Bd. 3*. Stuttgart; Weimar 1997, S.72.

<sup>16</sup> Vgl. HA VI 115.

テの住居の変更は、彼女の社会的 position 付けの変更、すなわち結婚に起因していることに注意しなければならない。結婚とは一組の男女が共同生活を営むことを社会的に認知させる行為なので、ロッテは社会的諸関係に身を晒すことになり、作品世界の構造では既成の秩序を表す市壁の内側に属することになるのだ。

それに伴い、ロッテのウェルテルに対する態度も変化してくる。夫のアルベルトは当初ウェルテルに対して寛容な態度を取り続けていたが、ついに頻繁に訪れてくるウェルテルを遠ざけるようロッテに求める。「人々が気にかけるようになってきているし、それにあちこちで噂になっていることも知っている」(HA VI 97)からである。アルベルトはウェルテルの批判する典型的な都市住民で、分別はあるが共感に欠ける人物とされている。アルベルトは、かつてフォン・B嬢が伯爵の夜会でウェルテルに対してぎこちない態度を取らざるを得なかったように、自分たちの置かれている社会的関係の中でウェルテルとの関係を決定しなければならない。ロッテもまたアルベルトとの結婚により、郊外の理想の世界から都市の現実の中に身を委ねることを決断したからには、アルベルト同様に社会的存在としての自己を意識しなければならない。そのために、ロッテはウェルテルに「印刷させて、全ての家庭教師に推薦できる」(HA VI 103)と言われるような説得を試みる。しかし、ウェルテルがロッテに惹かれていたのは、彼女が社会的関係に制限づけられて行動しているのではなく、現実感覚をもちながらも他者と共感する力を調和させて、自然に振舞うことが出来たからである。ロッテの変化を目の当たりにしたウェルテルは自殺の最終決断を下す。

ただし、ロッテの変化が自殺を決断する契機になったとはいえ、実際にウェルテルが自殺を決行する際には、自殺の意味が変化していることに注意が必要である。ウェルテルは自殺を決意してから直ちに実行するのではなく、

最後にもう一度ロッテを訪問している。この訪問の際に、ロッテの求めでウェルテルは自分の訳した『オシアン』を朗読する。<sup>17</sup> この朗読を聞いたロッテは、一度閉ざしたはずのウェルテルに対する心を再び開いてしまう。この時、ロッテの属していた現実世界は感情によって押し流され、都市の内部に一瞬のことではあるが都市の秩序が及ばない異質な空間が現出する。その中で、ウェルテルはロッテと感情だけではなく肉体的にも結びついて、<sup>18</sup> 完全な合一を果たす。こうしてウェルテルの願望は達せられる。にも拘らず、彼は自殺を決行するのだ。それは、2人の合一の瞬間は都市の現実の中では持続し得ないものだからである。瞬間を固定するためにウェルテルは、自らの時間の流れを断ち切ってしまうのである。

#### まとめ 現実と感情との結節点としての市門

ゲーテが滞在したヴェツラル自体は19世紀半ば以降都市を拡張するために市壁を壊して、かつての郊外を新しい市域へと飲み込み、都市と郊外とを隔てる境界が不明瞭になっていく。しかし、1770年代の未だ中世的な相貌を持った都市に滞在するウェルテルにとって、市壁は現実の加える制約として重くのしかかっていた。それは社会秩序や、分別の名の下に既成の秩序を

---

<sup>17</sup> 『オシアン』の持つ意味については、次の論文を参照のこと。Herbert Schöffler: *Die Leiden des jüngeren Werther. Ihr geistes- geschichtlicher Hintergrund.* In: ders.: *Deutscher Geist im 18. Jahrhundert. Essays zur Geistes- und Religionsgeschichte.* Göttingen <sup>2</sup>1967, S. 155-181.

<sup>18</sup> ロッセが既婚者である以上、当時の社会秩序はウェルテルのロッテへの恋は精神的なものにとどまることを要求した。そのため、ウェルテルはロッテを神聖なものとし、肉欲を抑圧しようとした。しかし、肉欲の高まりは抑えることが出来ず、ウェルテルの憂鬱を病的に高めることになる。Vgl. Thorsten Valk: *Poetische Pathologie, Goethes „Werther“ im Kontext zeitgenössischer Melancholie-Diskurse.* In: *Goethe-Jahrbuch* 119 (2002), S. 17.なお、同論文は、『ウェルテル』に描かれた主人公の憂鬱とそれに対する友人たちの処方、同時代の鬱病の捉え方、そしてその対処法から捉え直そうとしている。



機械的に適用していく態度として作品では描かれている。とはいえ、彼は都市の境界を打ち破ることで自らの現実の制限を取り払って自由になることも出来なかったし、市壁の内部に持続可能な異界を見出し、社会の加える制限からの自由を感じることも出来なかったために、市壁の外側に、自分の求める異界のイメージを外部化せざるを得なかったのである。

結局、ウェルテルは市門を通過して郊外に出ることで、自分の心情を確認し続けた。市門は、彼にとって現実世界を越境していくほとんど唯一の場だったのである。『ウェルテル』では、このように明確な境界を持った都市の構造が、主人公の置かれた現実と理想・絶望とに対応しており、都市の境界に位置する市門は、社会と主人公の感情との結節点となっているのである。

## テキスト

Johann Wolfgang von Goethe: *Werke*. Hamburgerausgabe. Bd. 6. Textkritisch durchgesehen von Erich Trunz. München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1988. 引用に際しては HA と略記し、巻数、頁数を併記した。なお、このテキストは 1786 年の第 2 稿に基づいている。

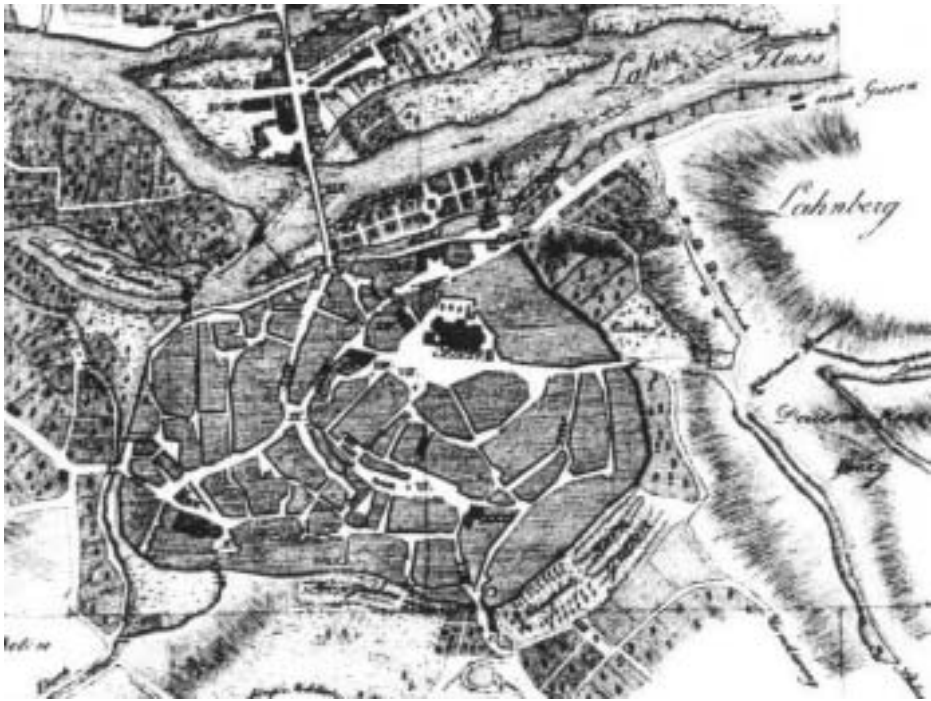


図 1 Grundriss der Stadt Wetzlar, 1806 (一部拡大) Historisches Archiv Wetzlar 所蔵。この地図から、当時のヴェツラルが市壁に囲まれていたことが読み取れる。